
舞 - H i M E —紅の剣士—

龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞 - HiME - | 紅の剣士 |

【Nコード】

N7127J

【作者名】

龍牙

【あらすじ】

舞 - HiME、武装錬金、SAMURAI DEEPER KYOの三作品のクロスオーバーです。錬金の戦士として戦った古の鬼の血を引く少年…二人の戦士の戦いの後、彼が降り立つのは一族禁忌の地『封架』。

第壱話 Aパート

月へと上る美しい山吹色の光、オレは…ただそれを見ているしかで
きなかった…。オレの手にした業はどちらにも届かなかったのだ…。

「…武藤力ズキ…。」

天へと昇って行く二人の戦士達、その内の一人の名を思わず呟く…。
オレはそのどちらとも戦い…そして、敗れた。

「…オレは…弱いな…。」

『彼』は月を見上げそう呟く

「結局、オレは届かなかったか…。」

月へと上る一筋の光を見据え、彼はそう呟いた。

錬金術

科学によって生み出された超常的な技術、錬金術の粹を集めて作り
上げられた『賢者の石』…『黒い核金』

使用者の唯一無二の武器となる『核金』を元に生み出されたそれは
人を超えた存在を生み出し、そして…不幸なる二人の犠牲者達はそ
れぞれ、希望と絶望を携え、命無き地へと上っていった

核金を持ち、錬金術により生み出された怪物『ホムンクルス』を狩
る戦士達、その一人として、先祖の罪を償うため、多くの命を救う
ために戦士となった、神を名乗るある一族の末たる青年

その一族の名を『壬生一族』、と言う

その一年後…五月、春風吹く瀬戸内海を進む遊覧船こすもす。その船上に、一人の青年の姿があつた。

「次の任務は…『風華学園』周辺の調査か…。」

景色を眺めながら、彼は所属する錬金戦団から与えられた任務の内容を誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。

風華学園周辺で起こっている不可解な原因不明の事故、事件…戦団の情報網でさえ、断片的に『怪物の姿』が目撃されたとして分らない、それに『ホームクルス』が関係していると考えた戦団は一人の戦士を派遣した。

戦士の名は『壬生 輝』…かつて、元錬金の戦士武藤カズキをヴィクター？として再殺する事が決定した際、最殺部隊の一人として彼と戦った者。もっとも、彼の場合は性格・性質に難があつて、正規兵として主力作戦には組み込めない他の者達とは違って、その武装錬金の特性上、戦士長火渡のお目付け役として配属されたとも言えるが…。

「…『黒き王の配する封架の地には手を出すな』…か、確かあの島だったよな、古文書によれば、唯一不可侵とされていた場所は。」

初めて読んだ時には大して気にも止めていなかったが、以前に読んだ事が有った彼の家に代々伝わっている古文書の一説が頭の中に過ぎる。

「そう言えば、短い間だけど住んでいた事も有ったけどな…あそこには。殆どよく覚えてないけど…」

どうでもいい事なので―今日までの日々が刺激的過ぎるのもある―今の今まで忘れていたが今となって、始めて幼い日の記憶の断片と以前読んだ古文書の内容を思い出す。

「ん？　なんだか騒がしいな…甲板の方か？　人が集ってる。」

今まで頭の中に浮かんできていた考えを霧散させ、輝は甲板の方へと視線を向けると、そこには多くの乗客が集り、騒がしくしていた。

何があつたのか気になった輝はポケットの中にある『それ』を強く握り、走って来る船員に状況説明を求める。

ポケットの中にある『それ』の重さ、その感触、その全てが心強い。

「何でも女の子が漂流していたらしい。今他の船員は引き上げにかかっているんだ。」

船員は輝にそう告げると急いで走り去ってしまった。その様子から推測するとかかなり危険なのだろう。

「…行ってみるか…」

「水を飲んでいろぞ。」

「早く引き上げろ。なんだソレは？ さつさと捨てる。」

「駄目だ。離そうとしない。」

船員達は救命ボートをロープで甲板手前まで引き上げて、セーラー服を着た小柄な少女を甲板の方に持ち上げようとする。少女の体重が軽い為、簡単に持ち上がるがそこから運ぶのが難しい。そもその原因は少女の手に有る物に有った。身の丈1.5メートルは有る黒い大剣。刀身の形状は西洋のバスターソードに近く、明らかに刃引きがされておらず、鋭く剣呑な輝きを宿しているのがわかる。

（！？ …… なんだあの子の持っている剣は！？）

その剣からは普通の剣から感じる取る事の出来る剣気とは違う、なにか異質な剣気を感じ思わず同様が走る。基本的にそういう物の専門分野は日本の主に戦国から江戸と言う時代の武器であり、西洋剣には詳しくないがそれから感じる取る事の出来るそれはどこか彼が最も慣れ親しんでいる物に近いと感じ取った。

「そこの君。ちょっと手伝ってくれないか。」

丁度、甲板に上がってきた輝に船員の一人から、声をかけられる。

「え！？ あ、はい。」

思わずその剣から感じ取っていた剣の放つ気配に気を取られていた輝は船員の言葉に慌てて返事を返し、甲板から少女の体を両脇から腕をいれ抱える。

(…黒い刀身か…。)

だが、その間にも常に彼の注意は少女の持つ剣に向けられている。その時、船員の一人が少女の持つ剣を引き離そうとした、その瞬間にそれは起きた。

大剣の黒い刀身が紅く輝く……それはまるで……意思を持ち眼を開く様に…

彼の心身の成長する10代前半と言う時期に体験した命をかけた殺し合いの中で養われた直感が告げた『危険』と…

だが、輝がその感覚が告げている『危険』の正体に気がついた時には既に時は遅かった。すでにその現象は起こっていたのだから。

「なに!？」

起こった現象は物理法則を無視して、ボートを支えていたレールを切断する。

鋭利な刃物で切断された様にロープは切れ、ボートはバランスを崩し、船員達は当然ながら大剣と共に海に落ちる。水面が跳ねる様な衝撃音が響く、水深が深かったおかげで船員は全員無事だったが、大剣は違いその重さが原因となり、暗い海の底へと深く沈んでいく。不幸中の幸いか、少女は輝に支えられ、海に落ちる事は免れていた。

(…今のは…あの剣の力か?)

そうだとすれば、もうそれを気にする必要は無い。その原因となった剣は既に海の底に沈み、回収する方法は無い。

他の船員の手を借りて、その少女は無事引き上げられ、広いスペースに連れて行かされたが、息をしていなかった。

「誰か人工呼吸のできるお客様はおりませんか?」

その係員の声に輝が手を上げ、もう一人少女が手を挙げる。

「あつ、できる方がおられましたか。良かった。それでは申し訳ございませんがお願いします」

輝と少女は前に出る。

「貴方は心臓マッサージの方をお願い。私は人工呼吸の方をやるか

する安心からか安堵の溜息を吐く。

「ありがとう、助かったよ。」

輝と少女は船員にお礼を言われ、セーラー服の少女は船員の手によってタンカに載せられて救護室へと運ばれて行く。

「助かったよ、ありがとう。」

船員が行ったのを見て、輝は少女に声をかける。彼は心から感謝を込めてそう告げると彼女の弟の少年が話しかける。

「本当、凄かったよ。お姉ちゃん。」

「まあ。救命講習がこんな所で役に立つとは思わなかったわ。」

「そうそう、それが実践できるのはすごい事だよ。」

「そんな、あなたの方こそ、あんな的確に。私ではあそこまで出来ませんでした。」

照れ笑いを浮かべ、輝の言葉に少女は謙遜する。その反応を見た輝は顔を真っ赤にしながら、真横に頭を向けて静かに言葉を告げる。

「そのままじゃあ、風邪ひくから、早く着替えた方が良い。」

「えっ！！！」

輝の一言に舞衣は驚き自分の体を見る。あの少女と密着したせいか、Tシャツは海水で濡れていた。

「はいお姉ちゃん。風邪ひくよ。」

「ありがとう、巧海。」

最初から用意しておいたのか、少年は姉に上着をかける。それでもやはり海風のせいで寒いのだろう、震えている。

少女は片腕で上着を引く、上着内の暖かい空気を逃がさないために、だがそのせいで舞衣の胸元がよる。

その動作に輝はさらに顔を真っ赤にしながら体ごと顔を背ける。

「あゝ…自己紹介が遅れたけど…オレは輝…壬生輝。君の名前は？」

「私？ 私は舞衣。鴉羽舞衣。」

着替えるためなのだろう、輝の後ろで彼女の足音が船内へと消えて行った。

力を持った青年と、祭りの鍵となる少女はこうして出会う、それは彼らの運命ゆえなのか？

第壱話 Bパート

二人の戦士達が月へと昇った時から一ヶ月後、彼らは『希望』を手にして地上へと戻り、戦団も解散となった。戦団の新しい方針として『未成年者は学業を修める様に』らしいが…家庭の事情で普通とは言えなかったが、一応、学生だったオレは学業の傍ら、鍊金の戦士として戦っていたので、それはあまり関係が無かった。

もつとも、戦団が解散したとは言え、『鍊金術』の技術は外部へと流出する。

知識を得、才能が有ったが為に『ホームクルス』を作り出してしまふ者も存在している。

その後も戦団に残り、以前から己の目的の為に戦団に所属していたオレはそんな敵を討ち続けていた。

オレの業で誰かが救えるのならば…オレは力の限り戦おう…オレが背負う『壬生』の名に掛けて。

二年…オレが戦団に所属していた時期は僅かそれだけだが、戦闘経験は並の戦士等より持っている。

オレは自分の力に自惚れる事等出来ないほどの天―そら―を知り、今のオレには決して届かない金色の神風―かぜ―を知っている。

『戦いが近い』…オレの中の本能がそう告げている。だが、何が来たとしても、決してオレの目の前では誰も犠牲にはさせない…。綺麗事でも何でもいい、諦めるよりは…。オレは、一つでも多くの命を守るために、化け物を…ホームクルスを狩る、戦おう、我が刃…

『■■■■』よ！

「転校のついでに、連休を利用した旅行か…。楽しそうだな。」

「はい。今まであまり遠出したことがなかったので、とても楽しいです。空気は綺麗だし海も。」

人懐っこい笑みを浮かべながら、鵜羽舞衣の弟、『鵜羽 巧海』はとても楽しそうに輝と話している。戦団の任務とはいえ海外にも行った記憶がある、その経験からいずれは自分も戦団の仕事（任務）等関係ない、純粋な旅に出てみたいと思っていた、輝には興味が惹かれる話だった。

船内にあるラウンジに二人は戻ってきて、向かい合って座っていた。外が暗くなった事も有って、人の数も多い。

舞衣が濡れた服を着替えに部屋に戻っていったので、輝はその間の話し相手を勤めていると言う訳である。

「それで、転校するのは何処の学校なんだ？」

「私立の学校で名前は――。」

輝の中に一瞬の動揺が現れる。『転校』と『目的地』…この二つから導き出される答えは一つしか存在していないのだ。

「巧海……！」

突然、上から掛けられる声、その声の聞こえた場所を見上げるとそこには着替えを終えた舞衣の姿、螺旋階段の途中で立ち止まり輝達

を見ている。

（あの制服は確か…風華学園の…。）

戦団から渡された資料の中に有った物と同じ彼女の服装を見て、輝は自分の予想が現実になってしまった事を感じた…間違いない、彼女達の転校先は…『風華学園』…輝の転校先でもあり、任務の場所でもあるその学園なのだ。

「搜したわよ、本当に。」

「お姉ちゃん…。」

資料は何度も見た、見間違うはずも無いオレンジ色の布地に白いライン。赤いリボン。枯葉色のスカート。

「お姉ちゃん…その格好。」

「ああこれ？ 着替え大きい荷物のほうに入れちゃって…。」

舞衣はリボンを人差し指と親指で摘みながら、苦笑いを浮かべて階段から降りてくる。

「なんだ、転校先はオレと同じなのか？」

先ほどの考えを一切見せず、輝はそう言葉を切り出す。

「あ、じゃあ。」

「オレも風華学園に転校するんだ。」

自分の考えを一切相手に悟らせる事無く、微笑を浮かべながら輝はそう告げる。その時だった…

ドカアアアアアアン

どこからか爆発音が聞こえ、船体が揺れた。

「爆発!?」(ホムンクルスか…? いや、単なる事故か、シージヤックか何かの可能性もあるな、最近短絡的だよな、オレ。すぐにホムンクルスと関係付けたがる…。えーと、爆発音の位置は…。)

「事故かな?」

ざわめきに包まれたカフェで輝と舞衣が呟く…その時だった。騒がしくサイレンが鳴り響き、カフェは大パニックに陥った。

「…救護室…あの子が運び込まれた場所か。」(それに…あの『黒い剣』の気配も感じる。海に落ちても戻ってくるなんて、そんな『呪い』でも掛けてあったのか…あれは!?)

輝は爆発音のあった場所に気がつくと同時に救護室から昼間見た海に沈んだはずの黒い剣の剣氣を感じ取る。何故、回収不可能な海の底に沈んだはずの剣が今、船の中に…それも持ち主のすぐ側にあるのかは疑問だが、そんな事を考えている時間は無い。

「だとしたら…すつごくヤバイじゃないの？」

舞衣は周囲を見まわしながら呟く、輝は彼女の言葉を聞き、一瞬だけ、出口の方向へと視線を向ける。

（…何が有ったか…見に行った方がいいか…。）

座っていたイスから立ち上がり、ポケットの中の『それ』の有無を再び確認する、迂闊に使うわけには行かないが、自分が考えている最悪の事態。万が一の場合を考えると使わない訳にはいかない。

そして、輝は自分の行動に呆然としている鴉羽姉弟に視線を向け、簡潔に言う。

「何があつたのか、様子を見てくる。オレの事はいいから、何かあったら避難してくれ。」

「え？ ちょっと…。」

そう言い切り、舞衣の言葉を聞かずに輝は走り出した。揺れている船内でパニックになっている他の乗客の間をすり抜けながら、輝は船内とは思わせない、陸とまったく変わらない程の動きでカフェの出口へと姿を消していた。

突然の行動と信じられないほどの輝の身体能力に暫らく呆然としていたが…

ドカアアアアアアアアアア

続いて聞こえた二度目の爆発音で二人は我に返る。

「巧海…いつもの薬はちゃんと持ってるでしょうね？」

「うん、ちゃんと持ってるけど」

巧海はそう言ってポケットから薬の入ったケースを取り出す。

「私も、ちょっとあの娘が心配だから見てくるわ。何かあったら私に構わず避難しなさい。」

舞衣はそう言っただけで救護室まで輝に比べると簡単に引き離される程度の速さで走る。

「…これは…何が有ったんだ…？」

救護室についた輝はその光景に呆然としていた…。鴉羽姉弟に様子を見てくる事を告げて、カフェを飛び出し、救護室に辿り着いた彼の視界に飛び込んできたのは…荒れている無尽の救護室の姿だった。

見れば、床には微かに水が滴り落ちた跡がある。確かめるまでも無く、その水滴は海水だろう…。それから考えられる事は一つ

「…やつぱり、あの黒い剣か…。」

部屋に水滴を付けた物の正体を推測し、この部屋にいた者が何処に行ったのか、確かめる手掛かりを見つけようとした瞬間。

ドカアアアアアアアアン

二度目の爆発音が輝の耳を刺激した。瞬時に何処で起こった物なのか気付き、踵を返し、救護室を後にする。

（戦闘か？ あの剣が戻って来たにしても、主を迂闊に傷つける事は無いはず。だとしたら、《敵》か！？）

敵の正体はまだ分からない…が、救護室の惨状、姿の無い昼間助けたはずの少女…そして、彼女の手元に戻った《武器》…以上の事から推測できる事柄は一つだけ。

（甲板で戦闘中…この船に何か危険が迫っていると言う訳か…。）

だとしたら、放っておく訳には行かない、この船の乗客に犠牲者が出るかもしれないのだから。

（ダメだ…そんな事は。）

脳裏を過ぎるのは先ほど知り合ったばかりの仲のいい姉弟の姿…。
もう誰にも自分の目の前で悲しみを作らせはしない。それが輝の決意であると同時に彼の背負う宿業への償いなのだから…。

そんな事を考えながら走り、甲板に辿り着くとそこには…超常の世界の中で生きているはずの輝さえも驚かせる光景が広がっていた。

「なん…だ…？」

二人の少女の戦っている姿。一人は輝達が人工呼吸をやって助けた海に沈んだはずの黒い大剣を持った少女。もう一人は始めてみる顔だが…美しい外見の紺藍色の長い髪のライダースーツの少女、持っている武器は球形のマガジンを持った奇妙な形の銃。

二人の持っている武器が何らかの力を持っている事、そしてそれが彼の武器である《武装錬金》とは違う異質な代物である事は容易に見当がついた。

「まだ、分からないのか？ 『一番地』に利用されていることに…。」

「うるさい。私は封架の地に行く。そして、兄上を捜す。」

二人はそう言いながら戦っていた。

（…『一番地』…？ 確か前にどこかで…あの二人の会話の内容から考えて、何かの組織か？ それに…『封架の地』だと！？ やっぱり、一族の古文書に書かれていた場所はあそこなのか？）

拳銃の少女の言ったどこか聞き覚えのある言葉『一番地』、大剣の少女の言った『封架の地』…その言葉を忘れないように聞きとめながら、輝はその戦いを黙って観戦していた。

今飛び出す利は少ない、どちらに味方するか、両方と敵対して三つ巴の戦いになるにしても…相手の能力は知っておくに越したことは無い。

「ミロク…!!」

黒い大剣の少女はそう叫んで大剣を突き刺す。それにより床から無数の刃が出現して拳銃のを襲う。

（ミロク…あの剣の銘か？ それに無数の刃が出現したあれが…あの剣の特性。）

「ちいいいっ…!!」

（おいおい、ちょっと待て…!!）

拳銃の少女はギリギリのところで回避する。だが…

ドガアアアアアアアン

大剣の少女の出現させた刃の一つが甲板に展示されていた自動車を切り裂き、三度、大爆発が起こる。

「…もうちょっと、周りよく見て戦え…。」

その戦いを見た歴戦の戦士のコメントでした。

「はぁ…性格に難がある再殺部隊の面々でももうちょっと、人目は気にしていたぞ…。」

ふと、輝の武装錬金の特性の都合上、組まされていた戦団の同僚、性格に問題は有るが基本的にいい奴らだった奇兵達の顔が浮かぶ。

そんな事を考えた後、考えていた最悪の事態や万が一の事態でもなかったので自分も避難しようと思いい立ち去ろうとした瞬間、彼の視界の中にもう一人の少女の姿が映る。

「え…？ と…鴉羽さん。」

舞衣の瞳はどこか虚ろで生気が無い、超常の世界で生きる輝でさえ、驚かせている光景なのだ。普通の少女がそれを見て正常な精神状態でいられる訳が無い。そんな舞衣を見つめていると見つめ返された。こんな時に不謹慎だが、輝はそんな弱々しい彼女を見て、可愛いと思ってしまう。

「うわ！」

舞衣の瞳が突然見開かれ、目の前の輝の顔に左フックが直撃しそうになったが素早くそれに反応し、右手の掌でそれを簡単に受け止めた。

「何？ 何なのあれは？ 何なのよ？ 教えてよ！ 教えてってば……。」

舞衣はポカポカと輝を殴る。流石に最初の一撃ほどではなかったの
でその程度で彼女が落ち着くならばと、黙って殴られている。何処
に向ければいいかわからない感情を舞衣は輝にぶつける。

暫らくそれを受けていたが、二人の少女の戦闘に視線を向ける。二
人の戦闘は次第に激しさを増し何時、輝達に流れ弾が飛んできても
可笑しくは無い。

視線をポカポカと自分を殴っている少女に向ける。これ以上悲しま
せたくない、怖がらせたくない……。彼女を連れてここから逃げるに
しても、今の状態の彼女を連れて、彼女が無事で済む自信は無い。
ならば、選択すべき道は一つ、それをなす為に『それ』を使わずに
何時使うのだ！？ 何一つ守れない力に……何の価値も無い。

「大丈夫……。」

自分の中で《それ》を使う決意を固めるとポンっと、優しく少女の
頭に撫でる様に掌を乗せる。

「え？」

見上げてくる少女に優しい微笑を向けて、輝は次の言葉を告げる。

「大丈夫、君はオレが守る。」

「え…？」

呆ける舞衣を他所に、少しだけ彼女を自分から引き離し、輝はポケットから表面にローマ数字の24と見たことの無いマークが刻まれた六角形の銀色の金属―核金―を取り出す。するべき事は戦闘の制止、相手を殺す事ではない…戦いを止める事。

必要な物は闘志と決意、形へと変える為のスイッチは掌握、そして咆哮

「武装錬金……！」

それにより、超常の科学技術の集大成《核金》は質量を増し戦士の唯一無二の武器へと変わる。

輝の叫び声に二人の少女も彼らの存在に気がつき、一時的に戦闘を止め、輝達に視線を向ける。そして、輝の手の中で六角形の金属は質量を増し、六角形の鍔、紅いラインの流れる白銀の刀身、真紅の握りを持った、一振りの日本刀を作り出す。

海の水、周囲に燃える炎、そして…周囲を包む大気―かぜ―、その全てがその刀の誕生を祝うように彼の元に集っていく。

「太刀の武装錬金…『エレメンタルエッジ』！」

核金が作り出したかなりの長さの日本刀を横薙ぎに振るい、その愛刀の名を宣言する。

「お前…その力は…まさか。ありえん、男が高次物質化能力を！？貴様、何者だ？」

拳銃の少女が銃を突きつけ、睨み付けながら聞いてくるが、輝はそれに怯まず睨み返す、今の彼の瞳の色はいつもの黒ではない

（なんだ、あれは…？ 紅い…まるで血の色…。）

炎に照らされているからではなく、本当に彼の瞳は紅く染まっていた。その瞳で睨み付けられ、心を圧倒的な恐怖に支配される。そして…

「…こんな所で周りの迷惑も考えず暴れ奴に答える必要は無い…。」

彼女の言葉を一瞬、疑問に思ったが、後ろにいる舞衣を守るように前に進み、そう答える。

エレメンタルエッジは核金の力であり、炎を集めるのもエレメンタルエッジの持つ特性の一部に過ぎないのだ。彼はまだ自身の《異能》をまだ見せてはいない。

輝はエレメンタルエッジを横薙ぎに振るい、周囲で燃えている炎をエレメンタルエッジに集めながら視線を舞衣に向ける。

怯えている…。今の自分にも、だが…。それが彼女を守ることの代償ならば安すぎる。

優しく微笑み再び同じ言葉を告げる。

「大丈夫、君はオレが守る…。オレの背負う、壬生の名に誓って。」

第壱話 Cパート

森の中、二人の少年が対峙している、二人の間に流れる雰囲気は穏やかなものでなく、二人の姿もまた和やかな物ではない。

一人は息も絶え絶えになり、血を流しボロボロな姿で有りながらもその手の中にある自身の武器、

突撃槍の武装錬金『サンライトハート改―プラス―』を構え、闘志の失われていない瞳で相手を睨み付ける少年、武藤力ズキ。

一人は真紅に染まった瞳で睨み付けながら構えをとらずに肩の力を抜き、右手で太刀の武装錬金『エレメンタルエッジ』を持ち、左腕には唯一ではあるが動かす事も困難と思えるほどの深い傷が付いている。その両の腕をだらりと下げている少年、壬生輝。

輝が取っている体制は、無構えを以ってあらゆる方向からの攻撃に備える。

隙を以って隙を消す、柳生新陰流において《無形の位》むぎのかたちと称される極意。

本来それは一対一ではなく、一対多の為の構えなのだが、万が一力ズキの仲間が襲撃してきた場合に備えて、あえてその構えを取っていた。

「さて、死合もここまでだ。幕引きと行こうか。オレから貴様への黄泉の旅路への土産。無明神風流奥義・白虎でな。」

輝は刀を構える…隙を持って隙を消していた構えを解いてのその技、想像出来るのは最大の一撃。

消耗した今の自分に出来るのは、その一撃を回避してのカウンター……そう輝は相手が考えるであろうと推測していた。それこそが輝の狙いなのだから。

そして、最大の一撃を放つべく、輝は刀を増幅器・ブースター……とする為、会話し、その力を解放させる。その瞬間、エレメンタルエッジから光が放たれる。

「無明神風流奥義『白虎』……！！！」

自分の武装錬金の特性を使い、自身の刀に大気を集め、エレメンタルエッジを振るう。

彼は振る、エレメンタルエッジを……風で作られた白き獣王を。

風の獣の振るう爪を輝の振るう刃を彼は回避する。その一撃は回避させる事が目的だった輝は心の中で『良く、避けた』と叫ぶ。

そして、風が……白虎の爪が相手を引き寄せ、残る牙で引き裂くはずだった……だが

「うおおおおおおおおおおおお！！！」

叫び声と共に向かってきたのは自身の元へ敵を引き寄せるはずの風を追い風とし、

一直線に突撃——チャージ——で向かってくるカズキの姿だった。

（なに！？）

輝の顔が驚愕に染まる。山吹色の光の槍が風の白き獣——白虎——の咽喉を貫き、エレメンタルエッジを弾き、輝の体に突き刺さる。

「ガハ！！！」（そうか…お前は…白き獣・白虎…の闘志を上回る闘志で白き獣・白虎…を破ったのか…。）

血を吐き地面に倒れ付す輝は一言だけ呟く。

「…見せてもらったぞ…お前の闘志を…。」

なぜ、この戦いを、敗北の記憶を思い出すのかは分からない。だが、あれはオレの未熟と油断が招いた無明神風流の汚点。

もう油断はしない、慢心はしない…それはオレの目を曇らせる…。オレはもう絶対に負けない…鍊金の戦士として…無明神風流の剣士として。

「それならば力尽くで答えてもらう。」

「出来るか？」

拳銃の少女の言葉にエレメンタルエッジを構えた輝は冷たく言い放つ。

「まあもつとも、『一番地』とは何なのか…答えてくれたら、考えてやらない事も無いがな。」

冷たく笑みを浮かべながら、エレメンタルエッジに炎を纏わせ続け

る。周囲から水を集めてもいいが、武装錬金の特性はなるべく隠したい。

『あと少しで周辺の消火完了』、心の中でそう呟きながら、会話で時間を稼ぐ。

答えてくれるならそれで良し、高次物質化能力がどういう能力かは戦ってみれば分かるだろう。そして

「貴様も奴らの仲間だろう、デュラン！！！」

（勘違いなんだけどな…それは…。）

輝がそんな事を考えて様子を見てみると、拳銃の少女の『何か』を呼ぶ声と共に彼女を中心に体感温度が一気に下がる。

（何だ！？）

輝の本能が異常を感じ取る…突然現れた氷塊、それが砕け…『それは姿を見せる。』

その姿はまさに銀狼、両側に砲門を背負い、機械的なその姿、絶対的な存在感が一带を包み込む。

（…ホムンクルス！？ イヤ、違う…あれはそんな物じゃない…それ以前に…『この世界の物』ですらない…。）

『ホムンクルス』…『核金』とは違うもう一つの錬金の技術、超常の科学技術の結晶、輝達錬金の戦士が倒すべき対象

だが、彼の目の前に現れた銀狼―名前はデュランと推測―は明らかにそれとは違う、隠れていた者が現れたのとは明らかに違う、別の場所から召喚された様な出現方法。何よりそれ自身が纏ってい

る気配、存在感…そして、意思が違う。

（あれが『高次物質化能力』という奴か…さっきのセリフから考えると…あの変な拳銃もそれで作り出した様だな…。）

チャイルド。当然、輝は知らない事だが、それは『チャイルド』と呼ばれている存在。

HIMEの想いを糧に成長する異形の子。その力は強大の一言に尽きる。

（敵は未知の存在、それも二対一…少し厄介だな…。）

獣型のホムンクルスとは数え切れないほど…人型の物は武装錬金を持った物やそうでない物、

錬金術の戦士として数多くの化け物と戦ってきた輝だが、今回はやはり勝手が違う。

敵の能力が未知数なのは当然、それは分かりきった事である。相手の能力が分かっている方が極稀である。

だが…目の前の少女と彼女の呼び出した銀狼―デュラン―は明らかに今まで戦ってきた化け物とは在り方自体違うのだ。

「GO!!!」

拳銃の少女はデュランに命令を下す、それに応じデュランは輝へと襲い掛かってくる。

「ちっ！」

流石は狼と賞賛すべき速さだが、その程度の動きに対応できない輝

ではない。だが、今は自分の後ろに舞衣が居る。
回避は不可能と考えた輝の判断は横薙ぎに振るう消化の為に集めた
炎を纏ったエレメンタルエッジによる迎撃。

技も何もない力任せの一閃により、デュランを強引に弾き飛ばすが、
さすがは狼と言った所か、
その柔軟な肉体を持つて見事に着地を決める。

デュランを援護する為に拳銃の少女は輝を狙い弾丸を放つ。
輝へと向かい放たれる弾丸、だが、それはエレメンタルエッジの纏
う炎によって蒸発させる。

「…見せたくなかったな…この眼は…。」

そう呟き、舞衣の元を離れ、自分と拳銃の少女を結ぶ直線上に彼女
が入らない様に移動する。

背中にある砲門…それが唯の飾りでもなければ、それは武装。加え
て、少女自身の武器も拳銃と遠距離攻撃専門の組み合わせ。
それを撃たれた場合の危険を回避するために舞衣から離れる。

それを見た拳銃の少女が彼を狙い何発も弾丸を放つが、輝は冷静に
エレメンタルエッジを振るい刃の纏う炎の熱量により、溶解させる。

それと同時にデュランも再び輝へと襲い掛かる。だが、輝はその一
撃を受け流す、力では負けているが、人間以上の力を持った相手と
力比べをする趣味は輝には無い。

銀狼の攻撃を受け流しながら、放たれる銃弾を融解させる、それを
繰り返しながら少女と己を結ぶ直線…その延長線上、
自身の背後に海だけしかない事を確認すると今度は再び力任せにデ

ユランを弾き飛ばす。

「ふう…。」

見れば大剣の少女も動きが無い、安心は出来ないが暫らくは拳銃の少女とデュランとの戦闘に集中できると考え、

軽く呼吸を整えながら空いている手の指先で瞳に触れた。

『紅き眼』…自身の罪の証にして、ある一族の証。輝はそれを何より嫌っていた…一族の背負う罪の重さを知っているから…。

そんな一瞬、目の前の相手から意識が離れた瞬間、輝の耳に機械の駆動音が聞こえる。デュランが弾丸を砲門に装填しているのだ。

「デュラン！ ロード、シルバーカートリッジ！ てエー！！！」

デュランの砲門より砲弾が発射され、宙を舞う中、まったく違う物へと変わった。氷塊の群。月明かりに照らされる氷解が輝へと向って飛ぶ。

（仕方ないな…技借りるぞ…。）

彼の修行仲間であり、友人でもある相手に心の中でそう告げ、相手の攻撃に対してその技で反撃する。

「灼欄炎帝！！！」

そう叫び、エレメンタルエッジを縦一閃に振るい纏わせていた炎を放つ。

『灼欄炎帝』それは本来彼の物ではない技をエレメンタルエッジの

特性と自身のアレンジで使える様にした技である。何気に過去の使用頻度は一番の得意技より多いことから、某戦士長のお目付け役と言われている彼の苦勞が伺える。

炎が氷塊の群と接触した瞬間、その全てを固体から液体を跳ばして、一気に気体―水蒸気―へと変える。

二人の視界を奪っていた水蒸気は輝がエレメンタルエッジを振った瞬間に巻き起こる風が吹き飛ばし、二人と一匹の姿を露にする。

（なんだ…こいつは？）

拳銃の少女の中に浮んでいるのは未知の敵への恐怖。

喻えエレメントがどんなに他のH i M Eより優れていようと、チャイルドの最大級の攻撃の前では齒が立たない。

だが…目の前の敵は表情一つ変えずにそれを相殺させた。

ギロ…

その感情を読んだかのように風が水蒸気を吹き飛ばし、先ほどの技を使った影響で刀から炎が消えたが
それ以外は何一つ代わらない輝の姿が現れ、拳銃の少女を睨む。

(!?)

「デュラン！ ロード、シルバーカートリッジ……！」

再び、少女は叫ぶ…炎が消えた事で相殺した技を使えないと思ったのか、それとも恐怖に駆られたためか…だが…

「デュラン！ ロード、シルバーカートリッジ……！」

(くっ、またか…。炎もないし相殺もすぐには無理…だったら…無に返すのにみ……なんだけどな、
けどな…こんな所で奥義使っていいものか？)

そう、自身の持つ『あの奥義』ならば、間違いなく彼の考えている結末を呼んでくれる事だろう。

「あれを軽々しく使う訳にはいかないよな…。」

白虎を破られた時の事を思い出し、その技を使う事を躊躇させる。だが迷っている時間は無い…使うべき技は…あれではなく、彼の使う流派の初期の技であり、最も得意とするあの技、そう覚悟を決め、エレメンタルエッジが光を放った瞬間。

「ミロク!!!」

「つて、おい!!!」

大剣の少女はそう叫んで再び黒い大剣を突き刺す。それにより床から無数の刃が出現して拳銃の少女とデュランを襲う。

「ちいいいっ!!!」

輝の叫び声を聞いた拳銃の少女は寸前で回避するが、弾丸を装填していた銀の狼は回避しきれず、僅かに刃の一つにぶつかる。それだけなら、まだいい…だが、装填された弾丸が暴発してしまった。

「鴉羽さん、危ない!!!」

慌ててその砲門の先に居た舞衣に向って叫ぶが、動けずに居る。

「くっ。」

全身に風を纏い、素早く彼女と弾丸が姿を変えた氷塊の間に割り込み、あの技を発動させる。

「無明神風流奥義…《玄武》!!!!」

エレメンタルエッジの切っ先より放たれる風。風は収束し、何かに姿を変える。それは蛇。いくつもの風の蛇が氷塊に向かい襲い掛かる。

それでも、まだ完全に氷塊を止められた訳ではない…完全に止め切れなかった氷が槍となり、輝へと向うが

ガキッ！

まるで何か硬い壁にぶつかったかのような音が周囲に響いた。よく見れば輝の眼前には、風で作られた壁ができていた。

弾かれ、氷の槍は甲板へと落ち、風の蛇に捕らえられていた氷塊も同じ運命を辿る。

「…止められたか…。」

輝が安心したように呟く…だが、

ガキッ！

もう一度、壁にぶつかり、氷塊の一部が弾かれる…弾かれた氷塊は輝を飛び越えて、舞衣の方へと向う。

「キャアアアッ！！」

だが、舞衣が目を閉じて両腕を前に出した時炎のバリアが出現して氷塊を溶かした。

そして、舞衣の両腕と両脚にはすぐに消えたが勾玉の付いたリング

が見えた。

「…今のは…。」

「お前、その力は…まさか？」

拳銃の少女は何か分かったのか、二丁の短銃を出して舞衣を撃つ。だが、それも舞衣が両腕を前を突き出した時に出現した炎のバリアで無力化される。

「やはり…そういうことか。」

拳銃の少女は何かに納得して輝達のもとにやってきた。

「おい、お前。」

「!？」

「忠告するが死にたくなければ風華学園には行くな。そして、今日のことは忘れる」

拳銃の少女は舞衣に銃を突きつけて言う。そして…

「それとお前。」

銃を輝へと突きつけるが、それと同時に輝は太刀を拳銃の少女へと突きつけた。

「お前にも言うておく。『死にたくなければ風華学園には行くな』。」

「

「そういう訳にはいかないんだよ…。」

彼女の言葉に輝はそう返す。その瞬間…

ドガアアアン！！

船内から爆発音が聞こえてきた。

「しまった。C4爆弾がまだ残っていたのか。此処に来るまでに回収したと思っていたのに。」

「つて、おい！！！！ そんな危険な事を忘れるな！！！！」

拳銃の少女はそう言って舌打ちする。それに対して思わず突っ込みを返す。

そして、船は映画『タイタニック』のワンシーンの如く急に傾き始めたのだ。そして…

「うわあああつ！！！」

「う…嘘でしょう！？」

大剣を持った少女と舞衣はバランスを上手く取ることができずにゴロゴロと転がって海にダイブした。

「ちっ、逃げられたか」

その有様を見て拳銃の少女は舌打ちする。

「舌打ちしてる場合か。早く助けないと…。」

輝はそう言って少女を怒鳴りつけるが、その彼女の返答は意外なものだった。

「安心しろ。あいつ等はあの程度のことでは絶対に死なん。彼女達も私と同じH i M Eだからな」

「なに？」

「あの小娘が持っていた大剣とお前と一緒にいた女のリングはエレメントだ。

強度と出したり消したりすることができる特性からして間違いない。

」

「……………」。(…H i M Eにエレメントか…)

敵意が消えた彼女の言葉に輝は何も言うことが出来ず説明を聞くことしか出来なかった。

「と説明はここまでにして私達も脱出するぞ」

彼女はそう言うと言った海に向かってジャンプした。そして、偶然通りかかった一隻のモーターボートに着地した。

「ヤマダ、遅いぞ!!」

彼女は帽子にサングラスをつけたヤマダと呼んだ男に向かって怒る。

「すまない。救命ボートの数が予想よりも多かったので此処まで来

るのに時間がかかった。」

それに対してヤマダという男はモーターボートの舵を握りながら少女に謝る。

「まあいい、とりあえずはあのフェリーの目的地である港まで頼む。」

「分かった!!」

「はあ、オレも脱出させてもらうか。」

同じように海に飛び込み、その直前に船体の一部を切り裂き、それを足場とし、海の上に立つ。

あとはエレメンタルエッジの特性を使い水を操り、目的地まで向えばいい。

(鴉羽さんと…あの大剣の子…巧海君は無事なのか…?)

その瞬間、彼は黄金に輝く何かを見た気がした。

「…封架の地…黒き王…か。」

思わずそう呟く。

一族の当時の王が不可侵と定めた地に壬生や錬金術に関わって来た自分も知らない異能、

キーワードは『H i M E』『一番地』…今度の任務は色々と厄介な
ことに成りそうだ…そんな考えが輝の頭を過ぎる。

第貳話 Aパート（前書き）

『目立つ事は極力避けたかったが転校早々…イヤ、それ以前か…？今日のフリーー沈没の関係者になっちゃった。まあ、済んでしまった事は仕方ないとするとして…巻き込まれた彼女達は無事なのだろうか…？それが、今のオレの疑問である。…武装錬金や無明神風流の技を無関係な人間の前で使ってしまった事は…忘れよう。』

「ふう…。」

知り合い―戦団の方とは違う実家の関係者―に頼んで隠れ家として用意して貰っていた…転校して入る事となる、風華学園の寮とは違うマンションの一室…そこでテーブルに向って、日記をつけている輝の姿があった。

そもそも、色々と人に見られたくない物騒な事柄の書かれた日記や実家からの連絡先や荷物の届け先として用意していた場所である。

一通り付け終えると手元にある、一息付く様に赤い目のひよこの絵が描かれたカップに入れてある紅茶を飲む

「一応…武器は核金が有れば十分だけど、用心はしておいたほうがいいからな。」

一本の小刀に布を巻きつけて、鞆の中に仕込んでおく。本来の愛刀は物騒すぎるので届けて貰っていないが、核金が使えなくなった場合の対策の一つにはなる。……………もつとも、それは無いよりはマ

シ、程度の物であるが…。

「制服の方には…核金を隠しておけるポケットを内側に付けて置いた…これで転校前の準備はほぼ万全と言った所か…？ あとは…。」

横目で壁に立てかけている一本の日本刀に視線を向ける…そう言った、寮には持ち込めないであろう核金以外の武器の置き場所や整理した情報の置き場所も兼ねての隠れ家であるのだ。

「…必要も無いし…持ち歩く訳にもいかないよな…警察とかに見つかったら、間違いなく…銃刀法違反で捕まるしな…。」

『何を考えてこんな物を送ってきたのか？』という考えを心の奥にしまい込んで、今日までに聞いたキーワードを思い出す。

「完全に『一番地』とか言う怪しげな組織の関係者に思われたけど…。『一番地』に『高次物質化能力』…それに『H i M E』か…。」

船上での拳銃の少女…年齢は自分とそう離れていないであろう彼女の言葉を信じるのならば、『一番地』は何らかの組織、『高次物質化能力』能力と言う異能を持つ物の総称を『H i M E』と言うらしい。

「…そして…ここが代々一族の王が不可侵と語り継いだ場所…『封架の地』か…。」

言われてみれば『風華』は『封架』と言い換える事ができる。今まで気付かなかったのが不思議なくらいだ。

「…一度、向こうから古文書を送ってもらう必要が有るかも…。」

『黒き王の配する封架の地には手を出すな』…何代目の王が記した物かは分らないが…自分の一族の王が不可侵と定めた場所…幸か不幸か、自分は不可侵と定めた地に足を踏み入れているのだ。もう一度、読んでおく必要があるだろう…。

「…それに…。」

脳裏に浮ぶのは…守ると言っただけなのに、守りきれず…沈没する船から投げ出され、海に落ちた少女の姿。

「…無様…未熟……………」

輝は己を罵る様にそんな言葉を呟き続ける。オレは守りきれなかった…。拳銃の少女は大丈夫だと言っていた。だが…

「…大丈夫なのか…？」

もし、無事だったら謝ろう…守りきれなかった事を…助けられなかった事を…。

ピシ…

そんな事を考えていた瞬間、かなり昔から愛用のカップに小さなヒビが入った…。何年も使っていて傷一つ付かなかった記憶のあるそれに…。

「な…なんだ…嫌な予感…それも…いい予感と一緒にするそんな不吉なんだか、良いんだか分からない考えが…。」

何故か茶柱の浮いている先程ヒビの入った紅茶の淹れてあるカップに視線を向け、そんな事を思っ輝であった…。

第式話 Aパート

後日、輝は風華学園へと向う道を歩いていた。生活用品、主には私服などは今日寮に届く事となっており、事実上のフェリー沈没の被害は簡単な手荷物だけ。戦闘用の変装道具と制服はマンションの方に送っておいたので問題はない。

『後は学校で普段から付けていた伊達眼鏡が沈んでしまった事だろうか？』そんな事を考えながら、歩いていた。そもそも、それを付けていた事に大した意味はなく、戦団の任務で転校した時、私生活での変装道具としてつけていただけであり、それも今まで意味を成した事はない。

そもそも、見られなければ何も問題はないのだから…。

門を潜って中に入り、注意深く周囲に視線を向け、学園の内部の事を頭に叩き込もうとした瞬間、

「な・・・なんだ？」

思わず呆気に取られてしまう…。そこには何かを引きずった跡があった……。

よく見るとその跡は色が黒く焦げているのか、近づくと熱さを感じた。まるで炎の跡と言ってもいいのかもしれない。

思わずフェリーの船上の戦闘で技を借りた友人の一人の顔が頭に浮んでくる……。が、すぐに考えから消す。考えるまでもなく彼がここに居るはずがないのだから…。

「…幻覚じゃないよな…？」

空気の流れ、鳥の声…微かに聞こえてくる生徒の声…間違いなく、現実だ…現実以外の何者でもない。

周りを見るとまだ春休みが終わっていないはずなのに、芝生の方には人が集まっていて、何かを引きずった跡も芝生の方まで続いていた。『そこにいけば何か分かる』…そう考え、輝はそこに向かい足を進める。

芝生には人が大勢集っていた。当然ながら、彼等の多くが輝と同じく風華学園のオレンジ色の制服を着ていた。そんな人垣を掻き分け前に出る事でやっと、この中心らしき場所にたどり着く。

「っ！？ …………… 良かった… 本当に…。」

思わずその光景を見て無意識の内からそんな言葉が漏れた…。

そこには舞衣と大剣を持った少女が芝生に倒れていて、彼女達の周囲に何故か炎の跡によるミステリーサークルができていて、まだ炎が所々に残っていた。

周囲から向けられる視線も気になるが…昨日の事を謝らなければならぬ…そう考え、彼女達に近づき…

「起きろー！」

大きく叫ぶ。

「んっ……」

それに反応したのか舞衣が目を覚ます。

「あっ、貴方は…無事だったんだ。んっ、ここは陸地？ そっか助かったんだ。」

舞衣は自分が溺死しなかった事に安堵するが、自分の周りに人が集まっているのに気付いてどんどん顔が青くなっていた。

「ねえ、此处どこ？」

舞衣は輝にそう質問する。

「私立風華学園…ここはその…よく分からないが敷地内だ。」

輝は舞衣の質問に簡潔に答える。舞衣は自分の前に建っている水晶宮（風華学園の名物的な建築物）を見て、輝の言葉が正しい事に付き、そして…

「はっ…はいっ！？」

大声で叫んだ。

「…叫びたくなる気持ちは分かるけど、少し落ち着いた方が良い。
…人が見てる。」

「あっ。」

（彼女が無事だったのは良かったけど、トラブルは起したくなかったな。ああ、なんだか、人垣の中から偉そうな人が出てきた。余計なトラブル第二段が起こりそうだよな…。）

何処かに引きずられて行く輝の考えが朝の風景の中に飲み込まれていった…。普段は『どこにでも居る普通の生徒』として生活する計画が水の泡と消えた様だった…。

その後、輝と鴉羽の二人は偶然その場に居合わせた生徒会執行部長の《珠洲城 遙》 - 出会った時に自分から名乗った - に捕まって生徒会室に連行されたのだった。…そして…その部屋に入った瞬間、輝の表情が一瞬で凍りつく…。

「な!？」

お盆に載ったお茶をにこやかに笑いながら配っている、少年の顔を見た瞬間、驚きを隠せずに何とも言えない表情を浮かべている。

「ああ、輝。そう言えば、貴方がこちらに転校してくると言っていましたね。」

芝生の件に関しては無関係だったが、彼女を知っている事から重要参考人として連れてこられた。そこには…

「お、おま…お前は…。」

「ええ、半年ぶりですね、同じ学園の生徒になるので会えると思っていたが、こんなに早く会えるとは思いませんでしたよ。」

「ま、ま、ま…ま、誠オオオオオ！！！」

「ええ、四聖天の誠ですよ。輝。」

輝の絶叫に周囲の視線が輝に集った…。

「さあおつしやい、何故あんな所で寝ていたの？」

珠洲城遥は怒りを隠さずに舞衣を尋問するが、それに対して鴉羽は…

「そ、それが…私にもよく分からなかったりして…」

愛想笑いをしながら答えるが、それは遥の怒りに油を注ぐ結果になった様だ。

「時間外の得体の知れない部外者とともに学内に侵入。かけがえない憩いの場である美しい芝生をみだらに著しく損傷。そこであられのない格好をさらし、我々学生の清らかなる目と感性・倫理を汚染したわいせつ物陳列。更に危険物の持込！！」

そう言っであの少女の持っていた大剣を指差す。舞衣はそれを見て昨夜のあの戦いを思い出してしまったのか元気がなかった。幸いにも、輝に対してそれほど恐怖を感じていない事が彼にとっては唯一の救いだっただが…そのせいか彼女の耳には遥の言葉は届いていなかったようだ。

助け舟を出そうにも…何故か、お客様扱い、お茶菓子付きでお茶を出された輝はどこか呆然とした表情で誠を睨んでいた。

「…そう言えば…お前はここの生徒だって言ってたな。」

「ええ、私と妹はここの生徒ですよ。半年前と一年前のあの日は休んでいましたが。」

心底嫌そうな表情を浮かべている輝とは対照的に、楽しそうに笑いながら、彼…輝が誠と呼んだ少年は楽しそうに笑う。

「以前は剣道部に入っていたんですが、『飽きて止めた』今は、暇だったので、こうして生徒会補佐を勤めさせていただいています。」

「…似合わないな…お前には…。それ以前にオレは重要参考人…。」

「いえいえ、私と貴方の仲じゃないですか…お茶とお茶菓子ぐらい出すのは当然ですよ。」

「…ここ―生徒会室―の備品だろう、これ？　つか、どういう仲だ？」

「ちゃんと許可は貰いましたよ。」

(…………こいつは…………。)

「では、少々失礼します。」

そっぴい残して、誠は生徒会室を出て行った…。

ため息を一つ付き、視線を舞衣へと向ける…。予想外の事態に動揺しながら、先程出て行った少年、誠の事…最大級の予想外の事を考えながら…。

「納得のいく説明を求めます。聞いてらっしゃるの？ 鴉羽舞衣さん！」

珠洲城は輝達―主に誠が―の態度が癪にさわったのか大声で怒鳴った。そんな珠洲城に頭にきた輝は席を立つ。

「アンタ、さつきから黙って聞いてれば随分と一方的に尋問するな。少しは落ち着いてこっちの言い分にも耳を傾けたらどうなんだ？」

そう反論する。

「なっ、何ですって！？ この…。」

輝と遥は舞衣を間に挟んで睨み合う。だが、その時…

「まあまあ、遥さん。ひとまずお茶でも飲んで落ち着こう。はい、舞衣さんと壬生君もどうぞ。冷めないうちに。」

黒を基調に赤いラインがアクセントとして入った、詰め襟の制服を着た生徒がそう言って珠洲城をなだめて舞衣にお茶を差し出し、輝に目の前に置かれたお茶を勧める。

「ありがとうございます。」

「あっ…ありがとうございます。」

輝と舞衣は互いにお礼を言ってお茶を飲む。輝曰く『誠の淹れたお茶だが、相変わらず味は問題ないし、毒も入っていない』そうだ。

「うん、美味い。とりあえず、オレのお茶に毒は入ってないな…。」

「ど、毒って…君達、どういう関係なんだい？」

輝の言葉に思いっきり引きながら、そう告げるが…

「…ええ、気にしないで下さい…時々、決闘挑んできたり、闇討ちとか仕掛けてきたりされる、友人ですから…。」

『……………。』

輝の言葉にその場に居た全員が沈黙に包まれる…。全員の心境はこうだろう…『それって、友人って言わないんじゃない？』

「…気にしないで下さい…最近はそれほどでもないのです…。」

「そ、そうかい。」

「あ…おいしいです…えっと。」

「三年の神崎黎人。一応この学園の副会長。よろしくね」

輝の言葉に沈黙していた黎人はそう言って笑顔で挨拶をする。だが、彼の行動によって固まっていた遥は再起動し、再びブチ切れる。

「黎人さん。副会長と言えども軽々しく口を挟まないで下さい。これは我々執行部の仕事ですので。」

「まあまあ、遙さん…。」

「そのまあまあ主義が気に入らないんです私は。貴方達がそういう風に校則を守らない連中を放置するから…おかしな事件が起きて我々執行部員の負担が…。」

（おかしな事件？ 何か起こっているのは間違いないか…船で戦った初めて見る異能を使う少女といい…。）

二人の会話から気になった単語を聞き取り、輝はそんな事を考える。

「まあまあ…。」

「ほら、また…！」

珠洲城は神崎と会話して更に頭にきたのか鴛羽が手に持っていたお茶の入ったカップを引ったくりガブガブと飲んだ。

「あゝっ…！」

舞衣が珠洲城に向かって叫んだその時だった。

「被告人に面会ですよ。」

生徒会室のドアが開いて誠と舞衣の弟である巧海が現れた。

「誰がよ！」

その言葉に舞衣は頭にきたのかそう言って誠を睨みつける。だが…

「おっ、お姉ちゃん。」

「巧海くっ。」

鴛羽の弟の巧海が鴛羽の元へと走る。そして抱き合った。

「心配したんだよ。」

「ご…ごめん。」

鴛羽は嬉しそうに涙を流していた巧海の頭を優しく撫でる。

それを見て、輝から思わず微笑み漏れる。心から安心したのだ、輝も昨夜から気になっていた事がやっと解決したのだから。

それは中央の席に座っていた女子生徒も同じなのかそんな二人を見て顔を和らげる。

「珠洲城さん。」

「はい、何でしょうか？」

「学園の安全を司るのが執行部の仕事。そうやったな。」

「うっ。はい、そうですね。藤乃…会長。」

珠洲城はばつが悪そうに返事をする。

「ほな、今は鴉羽さんが無事学園に来やったを喜ぶべきとちやいます？」

「……。」

珠洲城は藤乃のその言葉に反論できなくなってしまった。だが、精一杯の抵抗なのか輝達を睨みつける。

そしてそれから数分後、輝達はやっと解放された。…ただ…

「なんでお前が付いてくる…？」

「いえ、執行部長さんに対する対面上の監視もかねて、学園を案内しようと思ったので。」

余計なおまけが一つ付いてきたのだった…。そして、輝に言葉を返したあと、舞衣達に向直り、誠は優雅に一礼する。

「ああ、自己紹介が遅れて申し訳ありません。私は高等部一年『ひの陽神かみまこと誠』…輝の友人の一人で、四聖天の誠です。」

「…今は二人と候補一人だけだけどな…お前とあいつと勧誘している、カズキの…。」

「ええ、彼も是非入って欲しいですね。」

どこか話しに付いていけない舞衣達を余所に輝と誠はそんな話を続けていた。

第式話 Bパート（前書き）

《四聖天》…かつて、戦乱の世…この国において最強の侍の元に集った四武神。人間を越えた強さを持ち、戦場を駆け抜けた死神集団。ちなみに女人禁制。現在は《壬生輝》の元に集った四人の最強の錬金の戦士（ほぼ全員が戦団の正式なメンバーではなく協力者）。現在、二人抜けた為、欠番二人と候補一人…。現在は戦場を駆け回る守護武神の集団と昔と現在とは多少意味合いが変わっている。

そう、その四聖天の一人が《陽神誠》である。別の任務で動いていたため、対カズキ戦では全員が参戦せず…この四人が再殺部隊に加わっていたら…運命は変わっていたかもしれない。

なお、もう現在もメンバーになっている輝と仲がいいもう一人は輝の敗北後、ニートンアップル女学院まで輝と彼の実家の関係者一名やカズキ達と監視という目的の元に行動を共にした。その際、何度カズキ相手に戦いを挑もうとした事か（へーへ；）

なお、四聖天のメンバーは輝が戦団参加させた様なものではあるが、抜けたメンバー二人は現在も戦団に残り、戦団の面々とは仲良くやっている。

「…最強の『守護』武神…って、似合わないよな…オレ達には。」

「…いいじゃないですか、誉められて悪い気はしませんし。」

「……………」

噂を聞いた彼等の間で、そんな会話がなされた事があったとか無か

ったとか…。

それはさておき
閑話休題…

《陽神誠》… 事故で片目の視力を失っていると言うハンデを背負いながら、剣士としての実力は輝と互角に戦えるほどで、《心眼（半）》のスキルを所持。左目が見えない。

その片目は大切なものを守れなかった己自身の弱さの証。事故の際、彼が庇いながら妹も右目の視力を失っている。

現在は風華学園高等部に在学、元剣道部、飽きて辞めた現在は生徒会補佐。その為…生徒会は現在、一部の学生にとっては魔境と化している。輝が近づきたくない場所ナンバー1。

第貳話 Bパート

「はじめまして鴉羽舞衣です。数日後にこの学園の高等部の生徒になります。よろしくお願いします。」

舞衣は丁寧に自己紹介をする。

「はじめまして鴉羽巧海です。姉と同じく数日後にこの学園の中等部に入りますがよろしくお願いします。」

巧海も続いて自己紹介をする。

「ええ、こちらこそよろしくお願いします。巧海君でしたか？ 私の妹も中等部の生徒なので、仲良くしてあげてくださいね。」

「はい。」

誠と鴉羽姉弟の挨拶が終わり、誠に案内され、四人はちょっとした話をしながら、通路を歩いていたが、その途中で舞衣と一緒に倒れていた少女が気になったと言ったので、目的地となっていた保健室の前に着く。

「ここが保健室です。運び込まれた子はここに寝ているので。ああ、申し訳ありませんが、私は輝にちょっと話があるので、私達はここで失礼します。」

「……………」

多少嫌そうな表情を浮かべながら、誠の言葉に視線だけでそう返す。

「それじゃあ、私達はここで。」

「壬生さん、姉がお世話になりました。」

そう言つて保健室に入ろうとした二人の背中を見送る途中で輝は何かに気が付いた様に声を上げる。

「あつ。それと……………昨日はごめん、守るといったはずなのに守れなかった。」

心に残つていた、その一言をやつと言えた…。

「えっ？」

「じゃあ。」

そう呟き誠を促し、輝は後ろから聞こえる舞衣の自分呼び止める声を無視して、その場を立ち去っていく。必要以上に自分の仕事に巻き込まないための行動…それで良い、自分の戦いに巻き込んでもいい事は何一つ無いのだから、そう自分に言い聞かせる。

もつとも、フェリーでの兼はどちらかと言うと二人とも巻き込まれた形になってしまっているのだが…。原因は別に有るし…。

鴛羽姉弟と別れてから数分後、周囲に人影の無い中庭…そこで輝と誠の二人が睨みあっていた。

「それで話は…。」

「ええ、私と貴方の二人で任務を行う事となったので、お互いに情報交換と行きましよう、輝。」

誠の言葉に一瞬だけ、同様を見せる。

「オレはここに来たばかりだから、何も知らないぞ。」

「ええ、分かっています、先日のフェリーでの事を話していただければそれで良いので。何かあったんでしょう？」

笑みを浮かべながらの誠の言葉に思わず輝は『知ってたのか？』とでも言いたげな表情を浮かべる。

「では私から…まず、この周辺でホムンクルスの出現の有無ですが…《クロ》ですね。現に私も何度か交戦しました。」

「！？ ちょっと待て…お前、核金…。」

誠の言葉に慌ててそう叫ぶ、輝や誠の持つ異能の技を持ってもホムンクルスを殺す事は出来ない、故に交戦した誠が無事であるのは…。

「ああ、以前回収した核金の一つを着服していたので、それを使わせていただきました。」

予想外の言葉に思わずつこける輝だった。

まさか、戦団に黙って核金を持っていたとは…完璧に輝の予想の斜め上を行っていた誠であった。

「出現場所はここ風華学園の裏山と隣町の二ヶ所。ただ、それには妙な事があるんですよ…。」

ずっこけた輝を無視して話を進める誠…ただ、その表情が真剣なものに変わると同時に輝も真剣な表情で耳を傾ける。

「妙な事？」

「ええ、ホムンクルスによる犠牲者は出ていて、風華学園の生徒も何人も襲われてものの…学園の生徒…特に女生徒だけに限定すると死者はゼロ…掠り傷とも呼べない小さな傷を負うだけです。男子生徒の方は…怪我で済んでますね。そして、私が斬った動植物型ホムンクルス…その苗床になった人間の何人かが外国の軍人だったと言っ点です。」

「…この学園の生徒に死者ゼロ。好き嫌いでもしてるのか、そのホムンクルス共は。それに…こんな場所には似合わないな…外人…それも軍人なんて…」

誠の言葉にそんな声を上げる輝だった。

「ええ。不似合いですね。日本では捕獲が難しい動物のそれも居ましたし…。それで、そちらは何か？ 昨夜のフェリー沈没、貴方はその原因を知っていますね。」

「ああ。ここに来るフェリーの中でオレと鴉羽は戦闘に巻き込まれた…変な武器と獣を連れた女と今朝倒れてた大剣を持った子とのな沈没の原因は…前者の女のうっかりだ。」

「うつかり…ですか？」

「C4仕掛けたのを忘れていたそうだ。」

「…そ、それはそれは随分と危険な事を忘れていましたね…。」

「それと二人の持っていた武器は特性を持っていた…けど、あれは明らかに武装錬金じゃない。それにその女の連れていた獣…狼も明らかにホムンクルスじゃない。」

輝の言葉に誠は考え込む。

「…なるほど…。」

「それと、その時間聞いた『一番地』『高次物質化能力』『HiME』
と言う三つの言葉が有る。一番地は多分、組織名だ。」

「組織…ですか。多分…『高次物質化能力』と『HiME』は同じ意味の言葉でしょうね。推測ですが、おそらくHiMEと言うのが略称…もしくはその能力を持った女性を指す言葉…。」

「女？ 確かに『ヒメ』と言われて真っ先に連想するのは女だけだ…。」

「ええ。」

一呼吸置くと誠は輝へと視線を向け…

「高次物質化能力、それは英語に訳すとおそらく『Highly-advanced Materialaizing Equipme

「nnt」でしょうか？ 各英単語の頭文字は『H』『i』『M』『E』となるので略称である事は間違いないでしょう。単純な略である『HME』ではなく態々『ヒメ』と言う形にした事から考えると…。」

「…略称である『HIME』と『姫』や『媛』と言った言葉を掛けていると言う訳か…？」

「ええ、おそらくはそうでしょう。そして、そこから推測できるのは…『HIME』とは高次物質化能力だけでなく、能力を持った『女性』を指している事。でなければ態々、『HIME』等と言う名称はつけないでしょう。」

その結論にたどり着く…その結論が真実か間違いかは分からない。だが…唯一つだけ分かっている事は…

「「まあ、オレ（私）達には関係ない事だな（ですね）。」」

声をそろえて、そう結論付ける。

「まあ、向こうからケンカを売って来たら買うだけだ。」

「ええ。それに私達の任務は飽く迄、ホムンクルスの処理と怪物騒ぎの調査、進んで余計な事に首を突っ込む事はないでしょう。怪物騒ぎも、ホムンクルスの仕業で間違いないでしょうけどね。」

「それに『一番地』と言う組織については貴方の実家の方で調査して頂いた方が確実でしょう。国内では戦団の調査能力を上回っていますから。」

「…そうだな。」

思考の中へと意識がいつていた輝は気のない返事を誠へと返す、フエリーで戦った輝の事を一番地の仲間と勘違いした拳銃の少女は舞衣の事も『H i M E』だと言っていた。フエリーで輝が防ぎ損ねた氷柱を防ぎ、拳銃の少女の弾丸を防いだ彼女の力、それならば。

（必要以上に避ける事はなかったかな…？ いや、『能力を持っている事』戦う義務』じゃない…そうだ…これでいい。）

「ああ、それと…ここ一年の世界中のホンムクルスの創造主、それに資金提供していたスポンサーが分かったそうですよ。」

突然の誠の言葉に輝はキョトンとした表情を浮かべる。

「ちょっと待て、あれは確か…研究の途中成果の多くが消えたっていう。それは初耳だぞ。それに…全部何の関係もないって…。」

「ええ、つい先日、ここ一年の世界中のホンムクルスの研究者の増加、それを促している存在の正体が、やっと分かったと、あの人から連絡がありましたので。貴方には連絡が付かないので私から伝えておいてくれ、と頼まれました。確か…そのスポンサーの名は『シアーズ財団』…何が目的なのかは分かりませんが…この名前は今後とも覚えておいた方が良いでしょうね。」

「そうだな。」

そう呟きあい、二人は中庭から立ち去ろうとする。

「ああ、そうそう…。この学園の中等部の制服を着た銀髪の少年…『焰 凧』と言う正体不明者が居るんですが…出会ったら、迷わず

…切り捨てる事をお勧めしますよ。」

「おいおい…何が…。」

誠へと視線を向けるが…そこには…眼の笑っていない、それ以外は全て何時もと変わらない笑みを貼り付けている誠が居た…。

「ええ、随分と舐められたので…今度あったら御礼をしようかと思いましたが。ふっ…ふっふっふっふっ…。」

「……………」

無言のまま不気味に笑う誠と、そんな誠から無言のまま距離を置く輝であった…。

つづく…

おまけ…

「ところで、貴方は何故ここに…？今日はまだ春休みですよ。」

「オレの入る学生寮について聞きに来た…。」

「…全部埋まってますよ、男子寮。」

「って、なに!？」

「…手違いがあつたそうなので…。でも、貴方の事ですから、用意してあつたんでしょう? 隠れ家。」

「……………」。

今度こそつづく…

第貳話 Cパート（前書き）

刀を持ち睨み合う二人の少年…髪の色、真紅に染まった紅き瞳、容姿に至る、その全てが鏡に映した様に似ていた。

唯一つ違うのは彼らが持つ刀…一人は刀身が漆黒に染まった刀を持ち、もう一人は芸術品の如き美しい輝きを放つ刀。

風が吹き、雨が降り、それが二人を濡らすが二人は一切気にしていない…お互いの眼に映るは目の前の敵のみ。

「さあ、決着を付けようぜ。」

黒い刀を持つ少年が呟く。

「……………」

彼のその言葉に答える様にもう一人の少年も無言のまま、構えを変える。

「もう止め様、こんな事に何の意味はない…。」

彼らは親友で有った…

仲間で有った…

そして、二人は兄弟だった。

「お前が言うか…？ オレはお前を殺す事でしか、オレの運命は変えられない！ 宿命から逃れるにはそれしかないんだ！！！」

見据える物は互いの相手…

「それは違う！」

「黙れえ！」

「くっ！」

二人の動きは鏡に映した様に対象…そして…一人は覚悟を決め、一人は変わらぬ決意を持って、それぞれ、己の得意とする業を放つ。

（頼む、『天狼』。）

（やるぞ、『紫微垣』。）

彼等の思いに答える様に彼等の持つ刀が輝きを増す。

「『無明神風流奥義』…」

「『朱雀』！！！」

「『白虎』！！！」

彼等の放つ神鳥、火の鳥を模した神風―かぜ―と白き獣を模した神風―かぜ―がその中央で激突する。

「■■■■■■■■■■！！！！！」

「輝アアアアアアアアアア！！！！！」

激突する神風―かぜ―と神風―かぜ―、切り結ぶ二振りの刀と刀、二人は己が技をぶつけ合いながら、己が目の前の相手の名を叫ぶ。

「ハッ！！！」

毛布を投げ捨て、輝は時計に視線を向ける。時刻は刻む時間は『時半』当然ながら、午後では無く午前の…。

「……………夢…か？」

全身に汗に濡れた衣服が肌に張り付く嫌な感触を感じる。その夢が原因か、全身から流した嫌な汗が服をビヨ濡れにしていた。

「…なんでオレはあの時の…夢を…あいつを…あいつと戦った時の…。」

喉はカラカラに渴いている、だが、咽喉は水分を受け入れようとしない。その夢は最初の愛刀と兄弟として育った相手を失った時の悪^ク夢^ム。

そして…その時以来、過去彼はたった一度しか、使っていない…最も得意としていた業《朱雀》を…。

「…なんで…オレはあんな夢を見た？」

そう呟き、天井を見上げ、

「……………影司……………」

そう一言だけ呟いた。

第貳話 Cパート

(…今日は厄日か…?)

転校初日…輝はそう思ってた、先日、必要以上に係わらない様に考えていた鵜羽姉弟との二度目の再会…と言っても同じ日から登校する事になる転校生なのだから、それは当然と言っている。

だが、輝が考えている不幸はそれではない…呆れた様な視線を三人を道案内している相手に向ける。

「ここですよ、職員室？」

巧海の指さす戸の上には確かに『職員室』と書かれたプレートが存在した

「ええここで間違いないですよ。申し訳ありませんでした、先日の案内で職員室の場所に案内できなくて…」

巧海に向いそう言葉を返しながら、一礼して誠は立ち去っていく…そして、輝の横を通り過ぎる一瞬の間…

『…昼休み…この学園で目撃したホムンクルスとは別種の怪物のいた場所に案内します。』

『分かった。』

小さな声でそう簡潔に言葉を交わし、輝は無言のまま誠を見送る。

だが、輝は見逃していた…誠の顔に写っていた…先日も見たはずの…目だけが笑っていない殺気混じりの危険な笑顔を…

「何話してたの？」

視線で誠を見送っていた輝に舞衣が声をかける。それに気がつく
と輝は苦笑を浮かべ、

「いや、ここ最近変な事件が多くて執行部長の気が立っているから、
気をつける。そう言われた。」

本当の会話を誤魔化す為に先日、誠に言われた言葉を持ち出してそ
う簡潔に答えた。

「でも、あの人だって生徒でしょう？」

「オレもそう思う。でも、オレも転校生だからな…詳しい事情は知
らない。」

二人の間に短い沈黙が流れる。

「そうそう…あの娘は？ 船で拾った。」

「あっああ、あの娘なら保健室。全然眼覚まさないらしくて…。」

校庭の出来事から目覚める事無く、今もあの少女は眠り続けていた。
当然と言えば当然ながら、舞衣の言葉の歯切れが悪い。風華学園に
来るまでの自分の周りでは起こらなかったはずの訳の分からない出
来事が起きすぎているからだろう。

そう、あの少女と出会ってから。

無言のまま鴛羽姉弟の先に立ち職員室の扉に手を触れると、冷たさと優しさが同居した口調で話しかける。

「…とにかく、オレに必要なに関わらない方がいい。また死にそうな目に合わせたくない。」

そこまで言い切り、一呼吸置くと、

「オレはオレで金輪際君達に関わる気は無い…。」

口では関わらないと言っているも巻き込まれるたのならば、輝は迷わず助けるだろう…戦士としても、剣士としても…。

さて、『一度なら事故、二度なら偶然、三度以上は必然』と言ったのが輝の持論である。

そして、『二度以上続く偶然は必然』と言ったのも彼の持論なのだ。

横に視線を向けるとそこには、これから自分たちの担任になる教師と………自分と共にその隣に並ぶ、つい先程、関わらないと決めたはずの舞衣の姿があった。

（…宣言した早々これかよ…それに…。）

そして、もう一ヶ所教室の一部に視線を向けるとそこには…何時もの様に、にこやかに笑顔を浮かべながら、手を振っている誠の姿ま

であつた。

(……誠はともかく、鴉羽とは何の縁だ……?)

見事にこの広い風華学園の中で、(自分が知る限り)二人しかいない知り合い達と同じクラスなってしまったのだ。そう思うのも無理は無いだろう……。

そもそも、仲間であり、戦友でもある誠と縁が有るのは解るのだが、出会ったばかりの舞衣との間には何の縁が有るのかと疑問に思えてくるのだ。

「鴉羽舞衣です。よろしくお願いします。」

舞衣の明るい声が教室に響く。

「(まあいいか……変な事を考えていても仕方ない……。) 壬生輝です。どうぞよろしく。」

考えをそこで斬り止めると、そう簡潔に言い切り、優雅に一礼する。

そして、担任の教師に指示された席に着き、こうして鴉羽舞衣と壬生輝、そして、陽神誠の三人は同じクラスになったのだ。

時間が流れるのは早いか遅いか感じるのは人それぞれだろう……遅い考える者が居れば、早いと考える者も居る。この場合、多くの者達は前者と感ずるだろう……。

授業の大半が終わる開放感、そして、一日の半分が過ぎた時間帯の生み出す空腹、多くの生徒達が集る購買と言う学校に通う者が体験する時間…そう、その時の名は『昼休み』

「…学食だからと思って、甘く見ていたけど…美味しいな…」

多くの人で賑わう学食の中で、鍊金の戦士としての身体能力を駆使して確保した席でラーメンを食べながらそう呟く。

妙にその口調には不機嫌な物が込められている理由は…その眼前に存在している《彼》だろう。

「…この値段なら、悪くないな、混むのも分かる。」

「ええ、結構人気有るんですよ。」

輝の言葉に…正面に座る人物、丁寧に正面の席を確保して、同じ様にラーメンを食べている誠が言葉を返す。

そして、隣に座る者達が空いた器の乗ったトレイを持って立ち去った瞬間を逃さず、輝は小声で話しかける。

『なんの用だ、誠？』

『食後の運動を兼ねて、昼休みの内にこの学校の裏山に案内しようと思ったので。』

『裏山？』

『ええ、そこで以前、ホムンクルスとは違う怪物を目撃したので。』

『そうか。』

幸いにも、二人の小声での会話は周囲の騒音に掻き消されて、他の人間に聞こえる事は無かったのだが、隣の席に座る気配を感じたので、一輝としては、まだ聞きたい事があつたが―すぐにそこで会話を切り止め、食事の方に意識を向ける。

「学食の癖に高い。」

「ん？」

思わず隣から、割り箸の割れる音と共に聞えた…聞き覚えのある後悔に満ちた声に気がつき、その方向に視線を向ける輝。するとそこには…。

「「あつ。」」

いきなり、目が合ってしまう二人、そこに居たのは舞衣だった。

さて、そんなこんなで、舞衣が友達になつた少女二人・栗毛の少女が『瀬能 あおい』でメガネの少女が『原田 千絵』と言うらしい…によつて、後から来た巧海と共に昼食を取る事となり、昼の内の案内（の名を借りた調査）は無くなつたのだつた…。

輝としては、なるべく知り合いにはなりたくなかつたのだが…それはそれ。それ以前に舞衣とは既に知り合いになつてしまっているし

…。

「人付き合いは大切ですよ。それに断る理由が有るんですか？」

と言う、誠の言葉に渋々ながら、共に昼食を取る事になったのだった。

例え、変装していても、親しい相手には声や仕草から正体が知られる事が多いのだ…。親しい人間を作らないのは万が一、人目に着く場所での戦闘になった場合に対しての行動なのだ…。

誠の言葉に裏に有る『断る理由』そこまで、敵の派手な行動を許すのですか？』と言う意味に気がついて、行動を変えたのだった。

第貳話 Dパート（前書き）

「じゃあ其の伝説の先輩それ以来剣道、辞めちゃったんすか？」

「なんだか知らなえけど勿体ねえよな。」

昼休み、昼食を取る二人の剣道部員達の会話。

「なんでも、『ここで遊んでいても、たどり着けない相手がいるらしいぜ。』」

「片目の視力がなくなつたのに全国大会のレギュラーだったんですよね。其の先輩。」

「ああ、でも…全国大会に一度だけ出場した伝説の剣士との戦いは今でも…。」

「いつまでやっている、昼休みは短いんだぞ。」

「はいすぐにー。」

建物内から聞こえてくる罵声に男二人のうちの一人が答えを返す。

「あれ、ない！ ないぞー！！」

そして、何かが無い事に気がつき辺りを見回し…そして…

「お、おれの超激辛ダイナマイトカレーパーンー！！」

それと同時にどこからか、絶叫が響いたのだった。

なお、余談として追記しておくところの『超激辛ダイナマイトカレーパン』を食べた輝の反応は一口食べた瞬間：慌てて、バターを口に入れたという…。誠に関しては平然と食べていたそうだが、食べ終わった後、牛乳を飲み干したのだ。そして、最後に本編未登場の現在も残る四聖天の一人は無言のまま全部食べたそうだ。

第貳話 Dパート

「あれは…？」

輝は視界の中に飛び込んできた、一人の少女を見ながらそう呟く。流れるような紺藍色の髪、すらっとしたスレンダーな体つきに端正な顔立ち。其の姿に誰もが見惚れてしまうだろう。

だが、輝が彼女に視線を向けているのはそんな理由からではない…。なぜなら、彼女はフェリーで戦っていた二人の少女達の片割れ、砲塔を持った銀狼を連れていた少女だったのだから。

「珍しいですね、玖珂なつきさんですか。」

輝の疑問に答えるように隣に居た誠が呟く。

「…彼女も、この学園の生徒なのか？」

「ええ、隣のクラスの生徒ですが…彼女がどうかしましたか？」

最初こそ、『何を言っているんだ？』と言う意思が籠っていた口調だった、彼女がこの学園の生徒である事は制服を見れば一目で分かるだろう。だが、輝の様子を不思議に思った誠の問いかけに周囲を見回した後、小声で返事を返す。

「…フェリーで戦っていた内の一人、あの事故の原因を作ってくれた奴だ…。」

「…自分が仕掛けた爆弾の事を忘れていた人ですか…？」

「ああ。」

ふと、視界の中に舞衣の姿を捉える、この広い学園で二度もこんな形で出会うのは、普段ならば何らかの必然を感じずには居られなかったが、今はそれどころでは無かった。

彼女が友人達や弟と別れて、どこかへ向かうがそれは想像出来る。向かう先は保健室、戦っていた少女達のもう一人の片割れの現在の居場所と思われる所。そして、今の拳銃の少女、玖珂なつきから戦意は感じない。

「……見事に二人目の思わぬ再会だな……。……『玖珂 なつき』……。……か。」

『H i M E』…この言葉が関係する厄介事に巻き込まれた可能性のある輝にとっては、自分が知る三人目のH i M Eであり、自分を一番地と言う組織の一員と間違え、一番事情を知っているであろうその少女の名を忘れぬように心の中で呟く。

なお、彼の言う『思わぬ再会』の一人目は誠の事である。

聞こえてくる鐘の音を聞きながら、誠に促されて教室へと戻る。敵になるであろう、少女…なつきに戦意が無いのなら、舞衣と大剣の少女は心配ないだろう…だが、気になるのは誠の話の中に会ったホルムクルスとは違う怪物の事。

(……あとは放課後だな……。)

午後の授業…そこに舞衣の姿が無かった事に気がついた輝は、一瞬それを不審に思ったのだが、流石に転校初日から、抜け出して探しに行く訳にも行かず、大人しく授業を受ける事となった…。

さて、昼休みと並んで数多くの生徒達が、待ちに待ったであろう、時間帯の一つである『放課後』。

当然ながら、輝もそれを待っていた…もつとも、それは他の生徒達と同じ、『授業』からの開放だが、その意味合いは大きく違う。

放課後、誠に先導されて、輝は裏山の道を歩いていた。その目的は『調査』であり、以前に誠が『謎の化物』と戦ったという場所に向かっていた。

「…ホント、この学園って、一般的な学園の規模を超えてるな…。」
山道を歩きながら、そう呟く。思わずそんな感想を洩らしてしまった所で、輝に罪は無いだろう。

「…ええ、一番下が初等部からと言うだけでもかなりの規模ですし、校舎やそれ以外にも様々な施設が用意されていますからね。でも、一番驚く所は別にありますよ。」

「…何だよ、別に驚く所って？」

「…この理事長ですよ。」

「は？」

思わず理事長といわれて老人を想像してしまうが、何処に驚くのだろうかと考えてしまう。何パターンか、自分が驚くだろう、理事長の姿を想像してしまう……………だが、

「…《美咲》より、年下なんですよ…。」

《美咲》とは、風華学園の中等部に通う誠の妹であり、同じ事故で誠に庇われたものの左目の視力を失った為、常に眼帯を着けている。

そんな彼女よりも年下という事は……………それだけでも、十分に驚きなのだが、

「…年齢的に初等部の生徒なんですけど…ハーバードとケンブリッジを卒業して、博士号を持っているそうですよ。」

その言葉を聴いた瞬間、驚きのあまり、思わず固まってそこに立ち止まってしまう。

「…マジ…？」

「マジです。」

そんな会話と共に進行方向に振り向いた瞬間……………一本の炎の柱が天に向かって伸びているのが見えた。

「…な!?!」

その光景に声を揃えて、驚愕の声を上げる。光の柱にも見える《そ

れ』は紛れも無く、炎の柱だった。丁度、輝達の向かう先に有るそれは二人の体を照らしていた。

その光景に思わず一年前の戦いを思い出す。

月へと昇る山吹色の光の柱、それとは別の美しさを持つ天へと昇る炎の柱、その幻想的な光景に思わず目を奪われる。

「あれは…なんだ？」

「分かりません。ですが、向かった方がいいでしょう。」

誠の言葉に頷き、そこに向かうとした瞬間、二人の鍛え抜かれた戦士としての直感が『危険』と警鐘を鳴らす。

二人はその直感に従い、慌てて左右へと跳ぶ。

丁度二人が左右へと跳んだその瞬間、二人が今まで立っていた場所に巨大な何かが叩きつけられた。

二人が叩きつけられた何かに視線を向けるとそこに有ったのは、目の見当たらない頭、ぬらぬらとした体表、巨大な体躯、そしてその口に並ぶ獠猛な牙を持った…蛇に似た異形の怪物だった。

彼等が知るホムンクルスを機械的、無機たと例えるならば、生物的で有機物で構成されている様に見えるその怪物は、明らかにそれは彼等が今まで戦ってきたホムンクルスとは違うと言う事を告げている。恐らくはそれが誠の言っていた『怪物』なのだろう。

その存在を見せ付ける様にその怪物は雄叫びを上げるが、当の輝と

誠はその怪物へと注意を向けながらも、冷静な顔で互いに視線を向け合う。

「さて…ここで時間潰している暇はありませんね。輝、貴方はあの火柱の場所に向かってください。」

「いいのか？」

「ええ、あれとは別の種類ですが、似た様な怪物とは一度戦った事がありますから。」

「分かった、ここは任せた。」

地面を蹴り、怪物へと向かい走り出す。それと同時に誠は制服の内側に有るポケットの中から核金を取り出す。

蛇に似た怪物は己を無視された怒りをぶつける様に隣を走り抜けようと輝を叩き潰そうとする。だが、

「武装錬金！！！！」

その叫びと共に核金は形を変える。戦士の持つ唯一無二の武器へと…

作り上げられるのは、二本一对の十字架に似た鏢に短い六角形の鎖が付いた日本刀程の長さを持つ双剣。透き通った青い刀身、そしてそれが象られた瞬間、巨大な瞳が見開かれ、それに睨みつけられる様な錯覚を感じさせた。

「…《双剣》の武装錬金、『アルトロンクルス』！！！！」

誠から発せられる殺気に反応し、蛇に似た怪物は動きを止め、誠に向直る。

「さあ…貴方の相手は私がして差し上げましょう。」

嘲笑を浮かべそう宣言し、双剣―アルトロンクス―を構えたまま、右手を相手に向け『掛かって来い』とでも言う様に指を動かす。

蛇に似た怪物の注意が誠に向いている間に、輝はまだ火柱の上がる場所に向かって走る。後ろは振り向かない…輝は理解しているのだ…誠の力を…あの武装錬金の恐ろしいまでの特性を…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7127j/>

舞 - H i M E —紅の剣士—

2010年10月9日14時31分発行